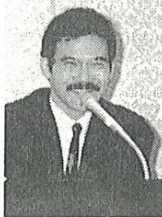


使いたる利権

道具学会フォーラムで改善訴え

ここ数年、左利き仕様の生活用品が少しずつ増えている。しかし、商品化の歴史が浅く、まだまだ利用者の声が生かされておらず、使い勝手はまひとつの製品が多いよ



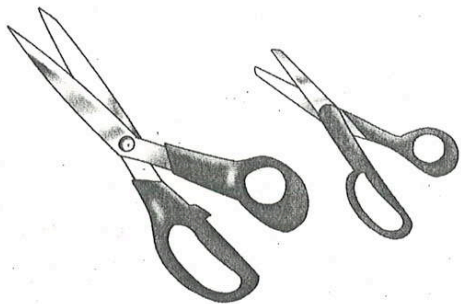
報告する富山さん(国立民族学博物館)

うだ。先ごろ、大阪の国立民族学博物館で開かれた道具学会第一回研究フォーラムで、はさみなどを例に現状を分析し「左利きに優しい商品」と改善を訴える報告があった。

自らの経験をもとに「左利き用具・考現学」をテーマに発表したのは、同学会会員で、福岡県在住の広

告代理店社員、富山祥瑞さん(三)。

九〇年代に入ってから、左利き用生活用品のカタログが回るなど、レフティ用の商品が流通機構に乗るようになってきた。そんな折、富山さんは、左利きの奥さんのために左利き用の缶切りをプレゼントした。



大人の左利き用はさみ(左)と、子供の左利き用はさみ(右)。刃の上下関係とハンドルの向き、輪の角度に注目

しかし「力の入れ加減が分らないので使えない」と奥さんの感想は散々。「こんなほしかった」の声を期待していただけにショックだった。左利き用のはさみを贈った時も反応は同じ。「ずっと右利き用の缶切りやはさみを工夫して使っていた彼女にとって『鏡に映った右利き用の用具をそのまま、製品化すれば、左利き用の用具なるはず』の論理で作られた缶切りやはさみは、右利き用以上に使いにくい代物だった」わ

鏡映し、にするだけではダメ

富山さんが調べていくと、数は少ないが、左利きの実態を配慮したはさみはあった。大人用は多くが過去、右利き用を使用し、その力の入れ方に慣れていることから、刃は右利き用にして、ハンドルの形や角度を左手仕様に変えてあった。子供用は、まだ白紙の状態にあるので、論理的には左利きが使いやすい形態である右利き用の鏡映しのスタイルになっている。

富山さんは、こうした具体例を挙げながら「『左利き用』が真に左利きの人の日用用具になるためには、表層的な対応ではだめ。今まで左利きが置かれてきた生活習慣上の要素も考慮しないといけない」と強調していた。